

第 4 回報告 (最終報告)

1. 報告書提出日

2018 年 9 月 21 日 (金) 一春学期・最終試験・修士論文執筆終了報告

報告期間：

2018 年 4 月 1 日～2018 年 8 月 28 日

2. 基本情報

氏名：河崎涼花

派遣ホストクラブ：三原ロータリークラブ

カウンセラー：橘 伸和 氏

受入ホストクラブ：Rotary Club of Norwich

カウンセラー：Janey Bevington

E-mail：sue.cool.flower@gmail.com

電話番号：+447849319464

教育機関・専攻分野：

イーストアングリア大学 国際開発学部

教育開発修士課程

MA Education and Development

School of International Development

University of East Anglia

3. 学業面での成果

3月中旬から4月中旬にかけてのイースター休暇のあと、春学期の授業が5月上旬に終わりました。授業の課題提出が完了した後、5月中旬には、課程（教育開発コース）の最終試が行われました。そして、試験終了からは、課程の集大成である修士論文の執筆に注力しました。8月末に提出締め切りに向け、指導教員の協力のもと、日々奮闘しました。

(1) 教育政策・実践【Education Policy and Practice for Development】

世界の教育政策（に関する文書）や実践活動を比較・検証する授業でした。国際機関が発行する政策文書、その作成過程や文脈・特徴を分析しました。この科目では、その提言書（Policy brief）の作成を個人の最終課題として課され、教育機会に関する問題を明らかにしつつ、包括的な教育を施すための政策を提案することが求められました。私はインド



の Internal migrant (child)（国内出稼ぎ労働者の子ども）の教育機会に関する提言書を仕上げました。Internal migration の定義とインドの市民権の二つの観点から、それらの曖昧性を問題提起し、政策の見直しの方向性を論述しました。現行の教育機会の提供と権利に関するガイドラインや教育機関・団体を調べる中で、「政策」という最終的には、やや現場から離れた場所で交わされる文書の作成・やり取りの限界を感じる一方で、その発端である現地の NGO やコミュニティの状況を政策過程に含めるには、このような Policy brief が重要な役割を果たすことを実感しました。教育を受ける権利やそれ以前に必要な市民権の保障のための政策やフレームワーク、学校や教育機関による包括的な教育実現のためのサポートを確立するには、様々なステークホルダーの連携が不可欠で、各々がまた、政策立案の過程で発言力と影響力を持つことが望まれます。現場レベルと政策レベル、政府と教育セクターの連携、研究機関の役割など、教育の政策と実践における構造を知るきっかけとなる授業・課題だったように思います。

(2) ジェンダー・多様性と社会開発【Gender Diversity and Social Development】

ジェンダーを始め、言語マイノリティー、民族、児童労働、のような少数派とされる対象が直面している不条理・不平等な教育機会・権利はく奪をテーマに、毎回の授業が開講されました。前回の報告書でも書いたように、この授業では最終課題としてグループプレゼンテーションが課されました。私は、イギリスとメキシコ出身の学生とチームを組み、半年をかけて、シエラレオネの児童労働問題をテーマに、問題提起と解決策提案のプロセスを考案しました。3人でそれぞれが情報を持ち寄り、議論し、プレゼンを組み立てる中で、彼女たちの考え方や思考の深さに圧倒されながらも、ディスカッション力や問題把握力を高めることができました。多国籍な学部かつ年齢もバックグラウンドも様々な学生が

揃う大学院ならではのアカデミックな経験ができたことを誇りに思います。また、現行のプロジェクトや取り組みの成果と限界を考察しながら、改善案として、いかなる活動を導入すべきか、その論理性や一貫性を整えながら、変化理論（TOC: Theory of change）を提示しながら、プレゼンテーションを組み立てました。事業・プロジェクトの評価や変化理論の考え方は、今後、例えば日本の開発援助事業の在り方を考えるうえでも、必要になるスキルやアイデアであると思います。この授業を通じて得た知識と経験を、今後、国際開発分野を始めとする仕事の中で活かしていきたいです。

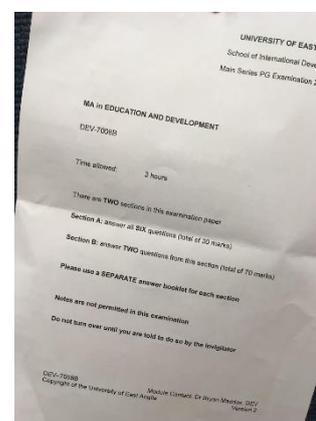
（3）識字と成人教育【Literacy, Development and Adult Learning】

この科目は教育学部の授業のため、受講している学生も普段顔を合わせる開発学部の友人ではなく、新鮮でした。とはいえ、科目名の通り「開発学」の要素も多く、途上国の識字問題や成人教育、ノンフォーマル教育などの背景に流れる理論や手法を学びました。また、私たちが実生活でいかにリテラシーを駆使しているのか議論する日もあり、身の回りの活動がほぼすべて識字と結びついていること、そしてその重要性を実感します。最終課題の一つの個人プレゼンテーションでは、そうした自分自身が経験した Literacy as Social Practice を取り上げ、理論や概念と結びつけながら、考察し、発表しました。私は日本の就職活動時の履歴書およびエントリーシートの事例を取り上げ、「フォームを書く」という活動の裏に潜むパワー（権威による制約や限界）関係をテーマに、リテラシーがいかに状況によって形や意味、目的を変えるかについてまとめました。最終的にプレゼンテーションでは高い成績をもらい、プレゼンスキルの向上と自信に繋がりました。授業は、レクチャーというよりは、毎時間が議論を交わすディスカッション形態が多く、学生同士で、それぞれの経験を話したり、興味関心を話したりと、活発にコミュニケーションが行われました。リテラシーにちなんで、各国の絵本の浸透や役割、家族内（世代ごと）のデジタルリテラシーの現状、中高生の記述能力における議論など、興味深い話題のもと、授業と実生活を結びつけることができたように思います。

授業以外での学び

○最終試験（5月21日実施）

在籍している国際開発学研究科には13の専門コースがあり、それぞれ、必須科目からの出題で最終試験が行われます。私が所属する教育開発コースでも、秋春の二学期で開講された二つの必須科目を基に作られた試験が実施されました。試験時間は3時間で、すべて記述式の問題でした。コースによって対策も様々ですが、私のコースでは House Keeping Session というコースの学生のみで行われるクラスにて、修士論文に関する情報共有と同時並行で、過去問を使った試験対策の時間が設けられました。また、



コースメイトのみで、空き時間に予定を合わせて、試験に向けた勉強会を頻繁に開くなどの工夫をしました。試験のための勉強ではなく、学生たち自身の身になるように、授業の総復習として、議論し合いながら、内容を思い出し、落とし込んでいくようにおさらいしました。コースワークや科目の課題が、試験の約 1 週間前に片付いたため、多くの時間を試験対策に充てることはできませんでしたが、限られた時間の中でも、広い履修範囲を楽しく効率的に試見直すことができました。当日は、あらゆるコースの学生が集まり、統一試験のような雰囲気、記述試験に挑みました。持ち込めるものはペンと辞書（必要な場合）のみです。このように海外大学・大学院で試験を受けること自体初めてだったので、試験にボールペンを使用することへの違和感を覚えたり、休憩なしの 3 時間の時間配分が不安だったり、問題用紙と解答用紙の使い方に困惑したりしましたが(笑)、無事、力を出し切って試験を終えることができました。テスト後には、コースメイトと一緒に試験終了を祝して、イングランド東部の海岸 Cromer を訪れました。夜は学部主催のお疲れパーティーに参加するという強行スケジュールをこなしました。修士論文執筆前の一区切りとして、私を含め学生たちは並々ならぬ解放感を感じていました。



○修士論文（8月28日提出完了）

“What kind of adult education on skills development could secure a decent work and employment?”

「Decent work 実現のための成人教育・能力開発アプローチのありかた
—インドのインフォーマル経済における成人の社会流動性と社会関係資本の観点から—
インドを対象に、政府のスキーム（能力開発政策）、ノンフォーマルセクター（女性の起業支援労働組合）、民間企業（技能研修機関）の 3 つのアクターの職業教育・人的資源開発事業のケースを比較検証しました。正規雇用および自営業促進のための成人教育的アプローチのフレームワークを用いながら、各ケースの、教育・労働市場間のニーズのギャップ・雇用問題への対応を比較しました。それぞれの教育研修事業の価値を図る指標として、インドというインフォーマル経済の文脈における、事業による受益者の **Social Mobility**（社会的流動性）と **Social Capital**（社会関係資本）の効果を考察。雇用創出・環境整備を通じた貧困削減と社会開発を視野に入れながら、より経済・社会・文化的な複合型教育の提供とともに、教育を通じた成人の社会流動性促進のためのアプローチ及び社会関係資本が整備された成人教育の必要性を証明しました。

11 月下旬から 12 月にかけて、修士論文の合否が伝えられる予定でしたが、当初のスケジュールより早まり、先月 10 月中旬に発表されました。無事、合格（PASS）し、安堵の気持ちと共に、これをもって大学院修士課程の修了となりました。約 3 か月の執筆期間中、やはり最後の集大成の修士論文こそ、最大の労力を費やす課題であることを痛感しな

がら、12500words の論文を書き上げました。テーマ設定の面談から、執筆まで、二人三脚でアドバイスをくれながら助けてくれた指導教授には大変感謝しています。

4. 受け入れロータリークラブとの関わり

【これまでの関わり】

5月17日(木) クラブ例会に参加

8月11日(土) 受入クラブ主催の Rotary Craft Fair (チャリティフェア) に参加

8月16日(木) 例会に参加 (帰国前最後の挨拶)

8月17日(金) カウンセラーの Janey さん宅で食事 (お別れの挨拶)



(左) 例会にて。日本からのお土産を毎回飾ってくれています。

(中央・右) クラブ主催のチャリティフェアの様子。数々の店や団体による物品販売。

【帰国後の活動】

10月16日(火) 三原 RC 例会にて帰国報告(卓話)

10月21日(日) 国際ロータリー第 2710 地区大会(尾道)への参加

11月6日(火) 福山赤坂 RC 例会にて帰国報告(卓話)



5. 直面した課題

コースワーク

今学期の科目では、グループと個人によるプレゼンテーション課題が課されていたこともあり、エッセイとはまた違う準備が必要でした。学んだ理論を発表に落とし込みながら、いかに、時間内に簡潔かつ Discussion の題材になる内容を盛り込むか、試行錯誤しました。友人と自主的に中間発表のような形で、作業の経過を共有したこともありました。

修士論文

最終的には 12500words を書きあげたのですが、論文の構成やチャプターの使い方、またフレームワークとケーススタディの提示方法など、研究手法に関して、秋学期に受講したリサーチ手法の内容を実践的に論文で応用する機会になりました。教授との面談では、私の研究意欲を大いにくみ取ってもらい、納得のいくテーマ設定ができました。友人とも進捗状況を報告し、鼓舞し合いながら、毎日毎日執筆に励みました。ほぼ寮の部屋に缶詰め状態で、時に大学の図書館で気分を変えながら奮闘したのを生々しく覚えています。終盤の 7 月から 8 月にかけては、教授が自身の研究やバケーションなどで不在にしていたり、一時的に音信不通になってしまったり、というような状況にも陥りましたが、根気強く書き終えることができました。改めて英語力（ライティング力・リーディング力）の重要性を痛感しながら、参考文献などから、文章の構成やパラフレーズのコツを掴んでいきました。計 60 以上の参考文献を読んだのも、人生において最初で最後の経験かもしれません。この修士論文執筆により、少し自分の英語力に自信をつけることができました。執筆中に友人がかけてくれた“Hardship makes us strong and independent.”という言葉は今後も様々な場面で思い出し、自分に言い聞かせていきたいと思えます。

就職活動

学事日程が終盤に差し掛かるにつれて、帰国に伴う就職活動も本格的に始めていました。イギリス国内で行われたロンドンキャリアフォーラムやバルジョブにも参加し、企業研究をしつつ、欧州選考や Skype 面接にも足を運んでいました。しかし、やはり最終試験や修士論文との両立には苦勞し、なかなか就職活動に本腰を入れることができませんでした。実際には、志望していた業界や会社は、個人的に直接問い合わせているケースが多かったため、帰国後に面接を組んでもらい、万全な準備と心構えの上で迎えられるよう、調整しました。焦りや不安もありましたが、英国現地で、そして遠隔で就職活動をしたことにより、多様な就職活動の在り方を見ることができたような気がします。さらに、多国籍な友人と就職活動に関して話をするすることで、各国のあらゆる就職活動事情や、友人たちの

多様なキャリアの考え方・価値観に触れ、少し心にゆとりを持つことができました。最終的には帰国後に数社の面接へ行き、ご縁あって内定先が決まりました。

6. 今後の課題・目標

前述の就職活動の結果、この度 2018 年 12 月より国際開発コンサルティング会社への就職が決まりました。大学院進学前から志望していた開発援助業界での仕事という夢の実現に、今回の留学が大いに活かされています。様々な専門性を活かし JICA などの途上国支援プロジェクト・ODA 案件を実施するコンサルタントとして、国際開発学専攻の強みを出していきたいです。国内外の建設事業を専門にしてきたハード（技術）系のコンサル会社ではありますが、入社後は、事業を拡大しつつある海外事業部への配属が決まっています。その部署で、ソフト（社会開発）系の事業に携わらせていただく予定です。電力や土木関連のインフラ案件から、人材育成・教育、紛争解決案件まで、まだまだ幅広い分野を勉強していきます。多角的な視点を養い、実行力と交渉力を高めたいです。

7. その他

地区に提出する最終の報告書の提出が、大変遅くなり、申し訳ございません。

こうして無事、1年間の英国大学院留学を出来た背景には、ロータリー財団の皆様の多大なるご支援のおかげです。本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。今後は一社会人として、そして学友として、今回の学びを社会に還元していきます。ロータリークラブを通じた素敵な出会いと経験を財産に、引き続き精進してまいります。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



河崎涼花